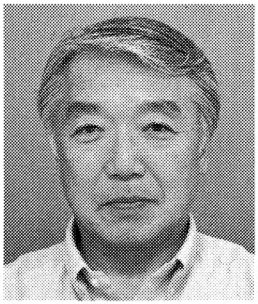
3.11あのとき私は ⑩

後藤博さん（石油ガス工事）

機材準備 出動を待機

設備保全と社員の無事 携帯電話2台で確認



後藤博社長

地震発生時、宮城県L Pガス協会スタンド部会の会議で仙台市中心部のブラザー軒の会議室にいた。揺れが収まるとすぐ会議は中止、解散となった。建物の外に出ると、屋上の貯水槽が壊れたのか、路面が水浸しだった。

本社はそこから徒歩10分、築38年のマンションの5階にある。部屋に入ると物が床に散乱し、花瓶が割れていた。3人いるはずの社員が誰もいない。近くの錦町公園に避難してるのではないかと考え、探しに行った。

外に出ると、片側3車線の道路は車がびっしり埋まり動かない。サイレンが鳴り、ヘリコプターの飛ぶ音が聞こえる。異常事態が発生し、ただごとではないと実感した。両側のビルが崩れるのではないか、ビルの上から何かが落ちてくるのではと不安になり道路の中央分離帯を歩いた。錦町公園は、近隣から避難した会社員たちであふれかえっていた。その中に社員を見つけた。

全員で一度会社に戻り解散した。後藤さんの自宅は長町。地下鉄か車で通勤するが、この日は車だった。激しい渋滞でいつ帰れるか分からず、とどまることにした。

マンションの入居者は1階のボイラー室に避難していた。後藤さんもそこに加わった。管理人の石油ストーブ2台で暖をとった。1階のカレー屋が食事を提供してくれた。雑音のひどいラジオが津波の惨状を伝えた。

携帯電話はドコモとソフトバンクの2台を持っていた。両方の通話とメールを駆使して白石市の白石工場に連絡を取り、高圧ガス設備の安全と従業員の無事を確認した。

午前3～4時、渋滞が解消したので自宅に戻りその足で白石工場に向かった。午前6時に着いた。休日だったが、間もなく従業員が出社してきた。

同社は充填所や高圧ガス設備の保安検査業務・建設工事を行っている。残ガスを回収する7・5トンバルクローリー（ガスコンプレッサー、液送ポンプ搭載）も所有する。タンクローリーの交通事故が発生すると、警察や消防の要請を受け、現場で事故車両の残ガスを回収することもしばしばだ。同じような緊急事態が地震と津波で発生していることは容易に想像できた。いつでも出動できるよう、ローリーや移動式製造設備、発電機、運搬車両、防爆プロアー、検知機などを準備した。

東京へ出張中で足止めされた社員らを迎えに行こうと13日、車を南に走らせた。しかし様子がおかしい。あちこちのSSで給油を求める車の列ができている。これでは東京に行っても、給油できず戻れない。そう考え、福島で引き返した。

伊達市の路上で、40歳くらいの男性のヒッチハイカーを乗せた。出身地の岩手県山田町に行くため、東京からヒッチハイクしているという。彼を仙台で降ろして別れた。

その夜、宮城県消防課から後藤さんの携帯電話に連絡が入った。多賀城市のヤマダ電機にLPガスタンクローリーが流れ込んだという。翌朝、市の緊急対策本部と現地で打ち合わせてほしいという要請だった。（続く）